

## 富永真琴先生

三重大学医学部生理学第一講座



平成12年12月から野坂昭一郎教授の後任として三重大学医学部生理学第一講座を担当させていただくことになりました。

私は、昭和59年に愛媛大学医学部を卒業して京都大学医学部付属病院内科での1年間の研修の後、浜松労災病院で循環器内科医としてのトレーニングを受けました。昭和63年に京都大学大学院医学研究科博士課程に入学して研究を始めました。その研究の課程で電気生理学に接する機会に恵まれ、京都大学第三内科（堀江稔先生）及び生理学教室（久野宗教授）で電気生理学の基礎を学びました。大学院修了後、京大大学生理学教室で指導してくださった岡田泰伸先生が岡崎国立共同研究機構生理学研究所に教授として移られたのを機に基礎医学研究に専念し、生理学研究所で心筋細胞及び上皮細胞のイオンチャネル研究を進めました。その後、実験対象は神経細胞に変わりましたが、一貫してイオンチャネルを中心に研究をしてきました。1980年代以降、多くのイオンチャネル遺伝子がクローニングされた状況を鑑み、イオンチャネル研究は電気生理学と分子生物学を両輪として進めなければならないと感じて留学先（カリフォルニア大学サンフランシスコ校）として分子生物学のラボを選びました。幸い、「痛み受容体」と呼びうるイオンチャネル内蔵型受容体（トウガラシの主成分であるカプサイシンの受容体）の遺伝子クローニングのプロジェクトに参加することができ、現在もカプサイシン受容体及びそのホモログの解析を通して痛み刺激受容の分子機構の解明を目指しています。また、新たな痛み刺激受容体のクローニングにも取り組んでいま

す。

生理学は本来、生体の動的な機能をよりマクロに研究する学問でした。しかし、研究領域が細分化され研究手技が特化するに従って個々の細胞レベルの機能を考察することが多くなり、時に組織あるいは個体レベルの考察がないがしろにされることがあります。私は、細胞レベルでの生理学を主に研究してきましたが、常にその細胞の機能が生体全体に及ぼす意義を頭において実験を進めてきました。その姿勢をこれからも大切にしていきたいと考えていますが、更に一歩進んで、1つのテーマに対して細胞から個体までを観察する研究を目指していきたいと思います。痛み研究を例にとるならば、痛み受容体機能を分子生物学的、電気生理学的に解析するのみならず、痛み受容神経の活動記録・脊髄の2次神経の活動記録・痛み刺激に対する個体の行動解析までもを包括的に行えたらと考えています。神経では、個々の分子の動きを生理学的にモニターすることが重要であり、これからの研究には生理学、分子生物学、生化学といった学問の枠を越えて研究目的に邁進することが必須であると考えています。私の得意とする生理学的な実験手技や知識を分子生物学的手法、発生工学的手法と併せて研究成果をあげたいと考えており、こうした研究姿勢、研究内容を学生にも伝えていきたいと思っています。

今後とも皆様の暖かいご指導、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

1984年3月 愛媛大学医学部医学科 卒業

1984年6月 京都大学医学部付属病院勤務（内

	科研修医)	1995年12月	University of California, San Francisco 博士研究員
1985年6月	浜松労災病院内科勤務		
1988年4月	京都大学大学院医学研究科博士課程 入学	1999年4月	筑波大学 基礎医学系 分子神経生物学 講師
1992年3月	同上 修了(医学博士号取得)	2000年12月	三重大学医学部生理学第一講座 教授
1993年3月	岡崎国立共同研究機構 生理学研究所 助手		